

「君の友を君自身から守れ」

——エッセイ「友情」と震える主体——

堀内正規

エマソンのエッセイは、大きく言えば〈自己〉(self)の〈世界〉(the world / nature / society)に対する関わり方をめぐる言葉の集積として読むことができる。けれどもその自己は、とかく誤解されがちのように近代の個人主義に合致するソリッドでかたまり状の主体ではないし、いわゆる確固たるアイデンティティを持った〈自我〉ではない。むしろとても弱い自己であり、動揺する主観性だと言ってもいい。エッセイ『ネイチャー』や「セルフ・リライアンス」に端的に示されているように、エマソンは自己をエゴとして固定させずに、自分より大きい何か、たとえば大文字のNで始まる「自然 (Nature)」や「大霊 (Over-Soul)」と仮に名づけるような何かに拠って立つものと見做した。それは言い換えれば、自己を大きなネットワーク・関係の網の目の中で(心身で)感じとる態度だと言える。ネットワークには宇宙や生命のそれだけでなく、他の人間たち(他者)の関係の網の目もはいつている。プラトニズム的なソウルへとつねに飛翔したがったエマソンだが、それはとりわけ、刊行されたエッセイ作品において、セオライズ(theorize)する欲望と結びついていて、完成されたエッセイだけを見ると、ロマン主義的な時代であったとはいえ、なんと退屈な御託を並べているんだらうという印象にしばしば読者は捉えられる。しかし、よく知られているように、日々の思索を書きつけた膨大な日記の断片を材料にして、それをつなぎ合わせる形で作られたエマソンのエッセイ(多様な部分の接ぎ木としてあるもの)には、セオライズしようとしてしきれないほころびが随所に見られ、まして日記それ自体に赴けば、読者が遭遇するのは多様に分裂した思考の発生状態である。その場合わたしたちは、全体性であるところのソウルへと簡単に飛翔できず、さまざまに他者たちの間で揺れ動くエマソンを読みとることになる。つまり、エマソンを興味深く読むということは、できあがったエッセイを、いわば裏地から透かして読む行為になる。膨大な日記の森の中を渉獵していると、そのうちに読者はどちらが表か裏かわからなくなる。それは必ずしも「伝記的」に読むことではないが、或る意味でエマソンのエッセイを彼の〈生〉(life)との連関のうちに読むことである。そのような読みは、エマソンのエッセイのロジック(論理構成)をいったん解きほぐし、再びそれを読み手の責任において編み直すことと同じだ。以下にわたしは『エッセイ集・第一集』(*Essays: First Series*, 1841)に収められたエッセイ「友情」("Friendship")について、主に「stranger」、「恥」、「距離」を三つのキー概念としながら、そんな編み直しをしてみたい。

エッセイ「友情」のロジックは、結局は現実の友人（たち）の存在を無化して、無人格（impersonal）な普遍性の場へと関係を解消してしまうという点で、キケローやモンテーニュといったエマソンの愛読した先人たちの友情論とは違っている。現実の友人は（理想に照らせば）知れば知るほど限界を露呈するために、最終的には個々の誰においても真の友情は求められず、神聖なソウルでの高貴な混じり合いが理想として語られることになる。だが現実の他者との友人関係が無視されているわけではない。「友情」はエマソンの他のエッセイに比べて明らかによりパーソナルである。このエッセイのペルソナは個人的な感情をあえて白状するような「わたし」である。自分のシャイな部分を認め、他人には冷たさやよそよそしさとして顕れる或る過度な感受性をさらしている」と Mary Kupiec Cayton が書いているとおり（208-09）、このエッセイにはそのいわば結論とは裏腹に、エマソンの具体的な他者との友人関係に対する感じ方が随所に垣間見える。エマソンが友と見做していたのは、たとえば最初の妻で故人となったエレン、弟チャールズ、スコットランドの文人カーライル、ブロンソン・オルコット、マーガレット・フラー、それにソローといった人々だ。実際、Jeffrey Steele が言うように、「キャリア全体を通じて、エマソンは友情という問題と格闘し続けた」のであり（122）、このエッセイは、とりわけ1830年代後半から1841年までの彼の友情についてのさまざまな思索の集積なのである。

1. stranger（来訪者／見知らぬ者）への震え

エッセイ「友情」の冒頭近く、第三段落には次のような箇所がある。

徳性と自重の念が住むあらゆる家で、見知らぬ来訪者（a stranger）の訪れが生み出す心の震え（palpitation）を考えてみるといい。賞賛を受けている来訪者が来ると告げられるや、歓びと苦痛の間で生ずる不安が、家中の者の心を襲う。彼の到着は迎え入れる良き心の人たちにほとんど恐怖をもたらす。家は掃除され、すべての物は本来の場所に飛ぶように置かれ、古いコートは新品と換えられ、できるならディナーを準備しなくてはならない。賞賛された見知らぬ人については、いい噂だけが告げられていて、よいこと、新しいことだけを耳にする。彼は人間全体（humanity）を代表している。彼はわれわれが望む存在である。その人のことを想像していろんな衣をまとわせているので、われわれは、そんな人とどんな会話やふるまいをして関わったらいいいのかと自問し、おそれ（fear）で落ちつかなくなってしまう。（341-42）

外から来訪する stranger へのこの「震え」、「おそれ」は、他者に対して自分が見合わない劣ったものではないかという不安であり、おそらく多くの者にとって親しい感覚だろう。これに続けてエマソンは、「けれどもその訪問者がおのれの偏愛や定義や短所を会話の中に割り込ませるや

いなや、すべては終わってしまう。……彼はもはや見知らぬ者ではなくなる。……心臓の高鳴りはなくなり、たましいのコミュニケーションは消え去る」(342)と述べるので、エッセイのロジックの線に沿って言えば、他者がもたらす震えの感覚は現実の関係においては消え去るものであり、どのような他者も自己の内部の震えに値する存在ではないと言っていることになる。けれども「たましいのコミュニケーションは消え去る」という言葉は、知り合う最初のときにおいて、他者が stranger として顕れてつかのま成立する交流が、「たましい」のものだと見做されていることをも示している。つまり、エマソンがここで語る stranger との交わりは、全否定されるのではない。たとえ主観のつくる像に過ぎないとしても、それを「たましいのコミュニケーション」として了解しようとするエマソンの態度もまた、そこにはあるのだ。少なくとも誰かを家に迎え入れるとき、こちらの主体が揺れることなく安定している、そういう迎え方よりも、主体が揺れてあたふたしてしまう、そういう迎え入れの方が、「たましいのコミュニケーション」から見れば遙かに望ましいと言われていることになる。このポイントがエマソンならではの。

こうしたポイントを一気に思想的に重要なものと見做す視点を提示したのは、今年(2010年)になって刊行された Branka Arsić である。「わたしはエマソンの無人格性(無人称性)を個々の人間の否定だとは考えないし、むしろ個々人の内部で働く(知覚や感覚、情緒や思考といった)諸力の集合の状態と見做すので、パーソナル・アイデンティティの側に立って議論をしたい。それは諸々の緊張や分割線や割れ目によって作り出されたものであり、それらが人格をたえまなく「震える(tremble)」ようにさせるのだ」(14)という、この〈震える主体〉の捉え方はわたし自身も考えてきたことだった。じっさいのテキストを読む場所に立つと理論として切れ味がよすぎる感じもするけれども、そこでエマソンの「友情」に関して語られていることには深く共感できる。「おそれ、苦痛の内の歓び——未知の者との友好的な出会い——人間性の印として理解されたもの——それは、自分が相手の期待に比肩できないのではないかというおそれを引き起こす。……この自己否定的な洞察は、エマソンの友情に関する理解において、境界を侵犯するような反転を兆すものである。他のすべての他者が良き者であるのに対して、……わたしは誰よりも悪い存在である。……エマソンの自己をめぐる広く流布した考え方とは逆に——外へと拡大を続け、強力な意志と自己充足を通して、他との関係を自らの利益に合致させてしまう自己、というような考え方だが——エマソンはここでほんとうに全く反対のことを提起しているのだ。……諸々の関係をわたしは自分のセルフの利害に適合させるのではない。むしろ、他との関係に対して自らのセルフを合わせようとするのだ。そのような仕方によって、わたしは他者の求めに応じられるような自己を作り上げる。」(192)まさしくその通りなのだ。

自らがすぐれた友には見合わない存在なのではないか、という感覚は、エマソン自身から見ると、克服すべきネガティブなものだった。たとえば1839年11月下旬の日記には次のような記載が見られる。

気高い精神の持ち主の敬意と友情がたまにわたしに示されるとき、わたしは自分自身と分裂するのを感じさせられる。頭部は黄金でも、足もとは土くれなのだ。自分が尊敬に値しないということについてなら、わたしはとても自信があるのでひとりになりたくなくなるくらいだ。もしわたしの大望が顕れるとしたら、天使たちもわたしを軽蔑はしないと思うが。自分が尊敬に値するかどうかについては、わたしが出くわす人は誰でも、いやおうなく知らせてくれるだろう。あまりにも貫禄がなく、あわれなごまかしの思いやりやあまりに多くの計算ばかりで、人と一緒にいると隠しようもなくくたびれた様子を顕わしてしまう——だから、心の中で彼らに早く行ってしましてほしいと懇願したくなり、自分への尊敬を取り戻すために、ウォールデンの森のアメリカツガの誰にも知られない木陰へと駆けて行きたくなるのだ。(726)

他者に対するこの自信のなさ、引け目の感覚が、エマソンに「孤独」を求めさせる。やはりウォールデンに孤独になりに行ったソローならどうだったろうか？ わたしには、ソローにはエマソンのような他人に対する申し訳なさの気持ちは見られないように思える。ホイットマンはなおのことである。自然の中でエマソンが感じるすべての宇宙とつながっているようなエクスタシーの感覚（それが主体というより主体性をエマソンに与えるものなのだが）は、現実の他者たちに対するこのような気分と、対極にありながらちょうど釣り合いを保っている。

1839年9月の日記には、「十三歳の或る日、叔父のS. R. [サミュエル・リプリー] がわたしに尋ねたことがあった。「ラルフ、どういうことだね、子どもたちはみんなお前が嫌いではけんかをしているのに、大人はみんなお前のことが好きだっていうのは？」——いまわたしは三十六歳で、事情は逆転している。——年長の人々はわたしを疑い嫌っているのに、若い人々はわたしを好きになる」(39) と記されていて、エマソンは友人のいない子どもだった（と本人が思っていた）ことが判る。ひととうまくアジャストできない、この感じはたとえば1842年4月14日の日記であれば次のように記される。「もしもわたしが正直な日記を書くとしたら、何を言うべきだろうか？ ああ、〈人生〉にあるのは不完全さと浅薄さなのだ。わたしはいま三十九歳を越えようとしていて、それなのにこの惑星の上で、同胞たちや自分自身の仕事との自分の関係を、うまく適合できてはいない。常に若すぎるか、あるいは年をとりすぎていて、自分を満足させることができない。その上どうやって他人を満足させることができようか？」(782) 自己を他人に適応されられないのは、自分に原因がある、自分など友に比べればたいした者ではない、というこの凹んだ感覚を、エマソンは友人の誰に対しても持っていたらしい。1840年5月に、ブロンソン・オルコットのことを書きながらエマソンは考えている。オルコットは会話のさい、どんな他人に対しても劣位の感情を持たず、誰の術中にもはまらない、それは彼が道徳的知覚において優れている

からで、同席する他者への共感も彼には困惑の種にはならない、という主旨のことを記したあと、エマソンは書く。「彼は冷静で、そつがなく、あかぬけしていて、けれども最上の事実に関心を向けている。わたしの場合、そうはいかないのだ。誰と一緒にいても、わたしはいつも共感しすぎてしまう (I sympathize too much)。相手が普通でつまらないとき、わたしもそうなる。逆に卓越した人々の場合、わたしも高みへと昇る。あらゆる単なるひとづき合いの場で、わたしは他人の見方から伝染されて、自分の見方をなくしてしまう。」(739) どんな相手であっても、眼の前にいるその人たちに、どうしてもシンパサイズして (しすぎて) 自分を保てない。だからエマソンは震えるのだ。こうした資質 (と仮に名づけてみるが) と、エッセイ「友情」の中の「彼 (友人) の優越性を賛美せよ」(351) といった言葉とがつながっている。自他の非対称性を自己の側からでなく、他者の側から見るこうした態度が、エマソンの友情論の基盤をなしている。だから自らの欠点として自覚されていたものが、同時に肯定的な思想の種でもあるのだ。これをわたしたちはエマソンの自己正当化、あるいはマゾヒズムと呼ぶべきだろうか？ しかし、こんな自分にさえも友がいることをなにより尊ぶ、そういう姿勢を持っている人間の方が、そうでない者よりも遙かに好ましい。それゆえわたしたちはそれを否定的に解釈すべきではない。

1830年代後半から40年代前半にかけて、コンコードはエマソンの存在ゆえに多くの人々を惹きつけた。いわゆる「超絶クラブ」に集った者たちのほかにも、エマソンと交流を持つようとしてマーガレット・フラーを初めとして多彩な人たちが来た。フラーを初代の編集長として1840年から出始めた季刊雑誌『ダイアル』はその成果だと言える。エッセイ「友情」(1841) へとつながる時期、エマソンは人生の中でかつてない盛んな交友関係を生きていたことになる。1840年8月30日付のカーライルへの書簡には次のような言葉が記されている。「あなたに会ってもっとあなたを知りたい、わたしの屋根の下であなたが気軽に自由に話すのを聞きたいという渴望を措いておくとしても、わたしにはあなたを三、四人の友人に引き合わせたいという望みが募っているのです。わたしの人生はほとんどずっと孤独でした。この三、四年の間、何人かの男女の人たちと間近につき合うようになりました。彼らの愛情は近頃、言葉では言い尽せない幸福をわたしに与えてくれています。」(277) オルコット、チャニング、ソロー、フラーを初めとして、何人かの名前が浮かんでくる。こうした複数の友人たちとのネットワークの中心に、予期せずというのか、心ならずもというのか、自分が位置していることに、エマソンは震えを感じていたのだ。

この感じはエッセイ「友情」に読める次のような言葉に顕れている。「今朝、目覚めたときわたしは、古い友、新しい友への心底からの感謝の念に満たされた。日ごとわたしにこのようにおのれの贈り物を示してくれる神を、わたしは〈美しきもの〉と呼んではいけないだろうか？ わたしは社会を批判するし、孤独を抱きしめる。しかし、ときおりわたしの門を通り過ぎる賢い者、愛すべき者、気高い者を無視するほどに恩知らずではない。」(342) あるいはまたこのような箇所——「わたしは自分の交際関係についてそれほど厳格なわけではない。たぶん、他の人々ほど

には、高潔な親交を知ってはいないからだろう。わたしはそれよりも、神々のような男たち女たちが一つの集まりの中で、互いに様々に関わり合い、彼らの間で高尚な知性が成立するような、そういうさまを想像して歓びを感じるのだ。」(349) こうした箇所をアナキズム的な共同体の理想を語ったものと見ることには無理があり、じっさい1840年に友人たちからブルック・ファームのコミュニンに誘われてもエマソンは参加しなかった。だが、それはこの種の共同体の実験があまりにも粗い認識の網の目によって作られていると感じていたからでもあり、それだけエマソンは自らの主体を信頼していられなかったからでもある。それは想像力がつかのま戯れとして生み出す幻像であることを、自身が身に沁みて分っていたと言えいいだろうか。望ましい友情の前提の一つとして、「真実 (Truth)」を挙げながら、エマソンは述べる。

友人とは、わたしが正直になれる人間である。彼の前では、わたしは声に出して思考できる。わたしはついに、こんなにもほんとうでこんなにも対等な人の前に辿り着いたのだ。その人にならわたしは、擬装した衣服の最も下のものをも脱ぎ落とすことができる。礼儀や考え直しを。普通人間はそれを決して脱ぎ捨てることのできないもののだが。そしてわたしはその友となら、一個の化学的な分子がもう一つと出会うように、率直で全部丸ごと、つき合うことができる。(347)

ひとの主体は、何重もの衣、下着に覆われていて、脱いでも脱いでもなかなか裸にはなれない。この認識はたとえばホイットマン (やアレン・ギンズバーグ) の感じ方とは対極の位置にある。下着を脱ぐときはひとりなのだ。それでも許しあえる間柄の友人というものに辿り着けるかもしれない、「ついに (at last)」——この「ついに」にこそエマソンの震えが垣間見える。わたしたちはここでも再びエマソンの欠点を見るべきではないと思う。いかにもピューリタンのだとか、育ちがよいとかというふうに、世慣れた大人が見るようにこの問題を扱うべきではない。この場合、震えは相手が他者であることとセットになっている。肉体的な次元で衣服を脱ぐのではなく、魂がすべて脱衣するとはいかなる事柄をいうのか。エマソン自身が「すべての人は、ひとりであるときには、誠実でいられる。第二の人物が入って来ると、偽善が始まる」(347) というように、彼の願いとは異なり、おそらく現実のどんな友人とも、その意味で完全に服を脱ぎ合うことは、不可能であるかもしれず、それはあるいは原理的にまた構造的にそうなのかもしれない。としたら、いかなる友人も他者であることに、エマソンは気づきかけている。だが望みを捨ててしまうことはできない。それで「友人とは、それゆえ、自然界における一種のパラドックスである」(348) と言われるのだ。「新しい人はわたしには一大事件であり、わたしの眠りを妨げる」(343) とエマソンは述べるが、その眠れなさの中に、震えがある。

2. 恥の感覚

エッセイ「友情」において「恥」という語が現れるのは一箇所だ。「友情に関してわれわれが求めるスタイルが高いものになればなるほど、当然のことだが生身の人間相手にそれを確立するのが難しくなる。世の中ではわれわれはひとりで歩くのだ。……だが崇高な望みがたえず忠実な心をはげまし、どこかよそで、宇宙の力の及ぶ別な領域で、たましいはいま現在も活動していて、持ち堪え、挑んでいると告げる。……未熟な時期、愚行と過失と恥の時期は孤独の内に過ぎ去った、と考えてわれわれは自らを寿ぐことができる。」(352) ひとりのときに味わってきた恥多い記憶は、理想的な友情関係において消え去る（はずだ）とエマソンは言っている。実のところ「恥 (shame)」という言葉は、公けにされたテキストでは消されていることが多いが、日記にはふんだんに見られる。とりわけそれは対人関係を語るところに顕著である。たとえば1836年6月には「わたしは愚痴を言い、不満になり、饒舌にさえなる。……普通のひとづき合いにおいて、……わたしはひるみ、早口にしゃべり、謝ってしまう。なぜだかわからないが、わたしはここコンコードで説教を頼まれるのがいやだ。日曜学校の教師たちの集まりに行くと、必ずおそろしさと恥を感じないではいられない」(462-63) という記載がある。こうした恥の感覚は自らの過去の記憶と関わっている。直接「恥」という単語を使っていなくても、1839年9月の記述はそれを端的に示している。「われわれがするように憶い出すことは恥辱 (disgrace) である。われわれの人生すべては最もあわれな想起の営み (remembering) である。記憶は消化不良と同じで、心の膨満であり、それが激しい嫌悪とともに夜ごと夕餉を喰い尽すのだ。」(696)

ひとは過去の自分に起きたことに関する記憶に閉じ込められているというのは、エッセイ「セルフ・リライアンス」の思想だが、もちろん「憶い出す」ことは誰にとっても悲観的な行為なわけではない。それはエマソンがとりわけ大切にしていた他者に比べて、自らを卑小な存在だと見做していた事実と関連している。結核で喪った最初の妻エレンの記憶を再婚相手である第二の妻リディアンに語ったことから記し始めた日記には、エレンだけでなく、やはり病で喪ったエドワードとチャールズの二人の弟も含めて、エマソンが亡くしてしまった故人に対する引け目の感覚が見られる。因みになぜ後妻である女性に最初の妻の記憶を語ることができたかと言えば、エマソンにとって故人となったエレンは〈友〉として意識されていたからだ。長い引用を試みる。

昨夜、リディアンとの会話で、憶い出し、憶い出して話した。わたしはコンコードの戸口で初めて見たエレンのほほえみへと戻って行った。あの芳しい関係へと遡って行き、いかに多くの翳と、いかに多くの叱責・恥辱 (reproach) を感じたことか。いつでも若い頃の記憶、過去の関係へと戻ると、必ずどんどん自分が縮んでいくような気がするの、不思議なことだ。エレンは、エドワードは、チャールズはそうではないのに。無限の悔恨が、その愛しい

名前、また彼らをとり巻く周囲の人たちの姿を苦いものにする。……ただわたしはこんなふうに思いなすことで自分を慰めるだけだ。もしもエレンが、エドワードが、チャールズがわたしの心のすべてを読みとることができたなら、彼らが見たのは、廉直な意志と、表面の冷たさや用心深さに対する寛容だけだったはずだ、そう考えてわたしは自分を慰めるほかはない。だがいまわたしは尋ねてみる。なぜわたしは、彼らのような美しい友と同じに、内側が寛容で気高いだけでなく、表面においてもそのような人間になれなかったのだろうか、と。彼らなら決して何を憶い出しても萎縮したりはしなかったろう。けれどもわたしはひるんでしまう——あんなにも多くの悲しいできごとがいまわたしの方に顔を向ける、まるでいままでわたしが盲目で正気でなかったかのように。ああ神よ、この悲しい思い出からわたしは学びましょう、これからは勇敢で慎重で真実な人になれるように。そして縮むことのない綱目を織り上げるように。これは肉にささった棘だ。(579)

大切な死者たちはかけがえのない友だったのだが、彼らがいかなる記憶にも身が縮む思いなどしないのに対して、自分は外側から見て「冷たい」人間と映り続けてきたし、「無限の悔恨」に責め苛まれて、「悲しい思い出」につきまとわれている。——エマソンの思想における愛する者の死の重要性は（わたし自身を含めて）多くの研究者によって繰り返し確認されてきたことだ。いうまでもなく、死者は、というより死んだ友は、現在の自分から限りなく隔てられており、完全に非対称な関係にある。記憶の中で、尊敬する死んだ友は、こちら側にいるわたしたちより優越している。生き残った者は、原理的な意味で、負債を負うと言っていい。ほんとうは死者も生きていたときには、「身が縮む」ような想いに捉われることがあったかもしれない。しかし問題はそのような一般化によって他者と自己とを均質にすることではない。エマソンはこのことを理解していた。兄弟の中でも最も信頼し尊敬していた弟チャールズが急な病で亡くなったあと、エマソンはその遺稿を編集して公けに残したいと願った。許嫁のエリザベス・ホアーにチャールズが送った手紙を死後に読んだエマソンは意外な一面を発見する。1837年の日記にはこう書かれている。「3月19日。きのう E. H. に宛てられた C. C. E. (チャールズ) の多くの手紙を読んだ。それらは気高いけれども悲しいものだった。読後感は痛ましかった。わたしはその作用から身を引いた。これほどの悔恨、これほどの懐疑、あれほど少ない希望、あれほどの哀しみは、わたしを苦しめた。わたし自身によってさえ気高い弟が苦しんだことを、わたしは見続けることができなかった。」エマソンは読者を「活動する気分」にし、「その力を生み出し、あかるい気持ちを掻き立てる」ことのないような本を信じない、と述べて、プルタルコスやモンテーニュやワーズワースがそうだと述べる。それに続けて、「けれどもチャールズもまた同じことを言ったに違いない。彼の会話もまた同様の性格を帯びていたのだ」と言う (506)。ここでエマソンは自分との会話において顕れたチャールズの性質を、許嫁にだけ打ち明けた暗い物思いに劣らない真実と見做して

いることになる。前者のいわばひとを元気づけるチャールズの側面は、非対称な距離を介したときにのみ顕れるもので、少なくともチャールズの自己意識によっては自覚されていない性質のものである。逆に言えば、エマソン自身についても、彼と交わりを得た友人たちから見れば、エマソンは「悔恨」に苛まれたり、自らを劣位に感じとったりする人間には見えなかったはずだ。そうした外からの像を誤解とは考えないような思考が、エマソンには働いている。友とはあくまでも外にいる自分から見たときに浮かび上がる存在であり、そのひとの内側については知り尽くすことができないような存在なのだ。

エマソンは周囲の人々から「冷たい (cold)」と思われることがしばしばあり、それは憶い出して身の縮む感覚にとられるような恥ずかしさの経験だった。『エッセイ集・第一集』で「友情」とペアになるように、その直前に置かれているエッセイ「愛」(“Love”)では次のようなことが言われている。「わたしはひとから言われたことがある。どこかの講演で、知性に対するわたしの尊重が強いために、わたしは不当なほど個人的な関係に対して冷たく見えた。だがわたしはいまそうした非難の言葉を憶い出すとほとんど心がひるんでしまう。」(329) たとえばオルコットが著書を出して批判を受けたとき、1837年4月の日記には有名な一節が書かれている。「新聞はオルコットを迫害している。わたしはいまほど実践的な点での自分の無能ぶりを悔いたことはない。わたしはものを見る眼として生まれてしまい、手助けする手として生まれなかった。わたしが友人を慰めることができるのは、ただ思想によってだけで、愛や援助によってではないのだ。だが、当然彼らはそれをも求めるので、結果としてわれわれの関係はすっかりだめになってしまう。」(511) 友人に対する内面の愛情はあるのだが、相手の望むようにそれをあらわすことができない。ここにエマソンの「恥」のとり一つの形がある。

ジェフリー・スティールが重視しているように (121)、第一集の『エッセイ集』を書き上げようとしていた1840年から41年にかけて、エマソンは書簡を通じてマーガレット・フラー (及びキャロライン・スタージス) と友情をめぐって意見を交換している。きっかけになったのは、フラーとスタージスが訪ねた折のエマソンの「冷たさ」だった。フラーとスタージスは二人でエマソンの親しさの欠如を (おそらくは愛情をこめて) 責めたわけだが、エッセイ「友情」は己れの冷たさを自己擁護する手紙のやりとりから、自らの恥ずかしさを克服して書き上げられたものだと言っていい。だが、よく考えてみれば、フラーたちが臆することなく (いわば格上にあたる) エマソンに対して、冷たいと言ひ募ることができたのは、そして当時としてはきわめて自由に性差を越えて友情を論じ合うことができたのは、エマソンに相手の話をよく聴こうとする開かれた態度があったからではないか。彼は手紙でフラーに「わたし以上にわたしを知る者はいません。——とても残念ですが——人間の暗い不親切さ、たとえ「火打ち石のよう」であっても彼が愛する者と面と向かい合い結び合う、その力の欠如。客人たちに対して彼はどんな償いをする事ができるでしょう。それを彼自身が長い間考えてきたのです」(350-51) と書き送り、更に「どう

やって返礼したらいいかわからないような愛情に喜ぶことができる者がいるでしょうか？ それはわたしのことです」(351)と述べている。冷たいと非難された自分を自己正当化するのではなく、その責めを甘受した上で、相手に耳を傾ける。その態度には、(エマソン自身には気づきようがなかったことだが)主体の凹みを持った者ならではの、心的な hospitality がある、と言わねばならない。

他者の非難は自己の主体に穿たれた凹みである。じっさいエマソンは、自らが覚える「恥」を、自己を形成するために用いるべきものと見做していた。1837年11月の日記には次のような記載が見られる。「ある熱狂者がわたしのもつて来て、禁酒運動を代弁するとき、わたしの両手は垂れる。——わたしにはどんな言い訳もできない。——わたしは自らの不活動に対する恥の思いとともに彼を尊敬する。／それから奴隷の友人がわたしに、南部の奴隷制の残酷さを見せに来る。——有罪だ、とわたしは叫ぶ。それから博愛主義者がわたしに、市民による学校教育の恥ずき無関心について語る。わたしは再び自らを有罪と感ずる。」そしてエマソンは記している。「わたしはこれらすべてのことをすることはできない。けれどもこれらのわたしの恥は、わたしが彼らすべてと厳密な関係を持っていることをあかさす印である。これらのどの大義もわたしには無縁ではない。わたしの〈普遍的な本性〉はこのような形で印づけられたのだ。これらの咎めもまたわたしの一部分である。それらは意味なくあるのではない。」(570-71) 現代においてはここで「普遍的な本性」と呼ばれているものをそのままに受けとることは難しいとしても、他者たちがおこなっている善を自分がしていないことに対する引け目、恥の感覚を、自己の一部として内部に導き入れ、恥を通じて社会とつながる回路を見出そうとするエマソンには共感が持てるはずだ。批判する他者に同意する主体と言えいいだろうか。1838年11月7日の日記から引けば、「わたしは認める。わたしはしばしばわたしのことを悪いかか愚かだとか言う人々に与したい気持ちになる。なぜならわたしはその両方ではないかとおそれるからだ。わたしは、どこかにこれに対する完璧な償いが存在すると信じているし、知っている。わたしの黒いところ (dark spots) のことはわたしがあまりにもよく分っている。いまだに自分自身に到達していないし、自身を満足させることもできておらず、聖なる服従からはほど遠いところにいる。——どうしたら他人を満足させることができようか？ 彼らの愛に値することができようか？ 不機嫌な顔や痛烈な非難の言葉がいくつかあるのは、これらすべてのわたしの欠陥にとっては、安い代償にすぎない」(659-60)とエマソンは書いている。ここで注意すべきなのは、エマソンが語っているのが自己の罪障意識ではないということである。ピューリタンの罪の意識ではなく、自らの欠陥の自覚は、自分にも判らない「完璧な償い」を待ち望むことにつながっている。「自分自身に到達する」こと、「聖なる服従」によって自己を満たすことを、いまのところはできていないが、いずれはできる。そういうときに向かって、終わりなく漸進的にすすんでいる。そこに到達するためには、自らの主体に凹みをつくり、「暗いところ」を自覚することが不可欠なのである。「聖なる服従」

という表現が現れるのは、エマソンが到達したいリアルな自己は、我意を捨て去り、自我意識を脱ぎ捨て、はからいを去ることによってだけ達せられるからだ。主体の凹みこそが、我意を去って終わらない運動をするための糧なのだ。

3. 距離

エッセイ「友情」の中でエマソンが懲過するのは「淡い交わり」(354)である。互いに衣服をすべて脱ぎ合うような心的な関係が現実では不可能だと悟っているエマソンにとって、それはごく自然な捉え方だったろう。この意味で、「友情については、……エマソンはとりわけ距離の唱道者 (an advocate of distance) だと見做すことができる」(128)という George Kateb の評言はただし。たいせつな友との、この距離を介したつき合いは、エマソンの生活においては、文通という形で具体化していた。じっさい「友情」には手紙による交わりについて書かれた箇所がある。「オパールの色合い、ダイヤモンドの光は、眼が近すぎるときには見ることができない。友人にわたしは手紙を書く。そして彼から手紙を受けとる。それはあなたにはちょっとしたことにしか見えないかもしれない。わたしにはそれで充分だ。それは彼が与えるのにふさわしい精神的な贈り物であり、わたしが受けとるのにふさわしいものだ。」(351) 手紙を介した交流によってこそ「オパールの色合い」は眼に見えてくるというこの主張は、考えようによってはさびしいものだ。エマソンは同じエッセイの中で、友人を求める者の真の気持ちを、かりそめに戯れるように、数行の手紙の言葉にして書いている。

親愛なる友へ、――

もしもわたしがあなたについて確信があれば、あなたの能力を信じられて、わたしの気分に合わせてくれることを信じていられるなら、わたしはもう決して、あなたが来るとか去るとかについて、細かいことを気にしないでいられるでしょう。けれどわたしは賢くはなく、わたしの気分はとても簡単に征服されます。そしてわたしはあなたの天賦の才を尊敬しています。それはわたしにはまだ推し測ることができません。しかしわたしはあなたの中にわたしに関する完璧な理解があるとは思えません。だからこそあなたはわたしにとってかぐわしい責め苦 (a delicious torment) なのです。わたしは永遠にあなたのもの、さもなければ決してあなたのものではありません (Thine ever, or never.)。

この自らを下に置いた、実に屈折した言葉には、エマソンならではの友人への激しい期待と、幻滅への恐れがある。永遠の友であるためには距離をなくすべきかもしれない、しかし距離があるからこそ友への呼びかけ (手紙) は成立し、責め苦はかぐわしいものとなる。そうした友人をめぐる運動がよく窺われる。

手紙による交流という点で、エマソン自身が自覚していた相手はトマス・カーライルだった。海を隔てて、何ヶ月もの時を置きながらの文通は1834年から1872年まで続いた。Kenneth Marc Harrisの言うとおり、「彼らが成熟した年月にあっても最も重要なできごとを分かち合ったのは、書簡を通じてであった」のであり、同時に「しばしば考察されてきたように、もしも二人が近くに住んでいたとしたら、彼らの友情は長続きしなかっただろう。」(4) 1830年代後半、エマソンは何度もカーライルに渡米を勧め、コンコードの自宅に来るようにと書簡で懇願しているが、そのさいにも、決して相手に対して踏み込まないように気をつけている。1836年9月17日付の手紙にはこう書かれている。「もしあなたが友人の指図に悩まされそうになったら、あなたは牧草地へ赴かれればいい。そしてわたしの田舎の牧場で憩い、友と語らわれればいいでしょう。もしあなたがここに高貴な兄弟としておいでになれば、食事のときと散歩のとき以外は、あなたの賢明な一日を決して邪魔するようなことは起こらせません。わたしがあなたの前に出るのを慎むように、わたしはあなたを他の人々からも守りましょう。」(149) これはきわめて特徴的な、エマソンのなつき合い方である。エマソンによれば人間は誰も“insular”な（閉じた／島のようなあり方をした）存在なのだ。1837年5月の日記ではカーライルにも言及しながら、人間同士の交流が部分的にとどまることについて書いている。「失望せるたましいよ！ われわれを隔てるのは海や貧困や職業などではない。たとえば今日わたしの戸口にオルコットがいる——しかしだからその分だけわれわれの結びつきは深まっているだろうか？ いな、海も職業も貧しさも、見かけ上の柵にすぎない。〈人間〉は島状の存在なのであり、直接触れることが不可能なのだ！ すべての人は無限にはじき合う球体である。そうした条件のもとで個々の存在を保っているのだ。」(526) ホイットマンとはあまりにも対極的な感じとり方、むしろメルヴィルを想起させるような言葉である。どんなに親しくなったとしても、友人同士は互いの距離を廃棄することはできない。海の方からやって来る友人を他の人々から守るというだけではない。エマソンは友人を自分自身から守らなくてはならないと述べる。

彼を自分の片われとして守れ。彼があなたにとって永久に一種の美しい敵 (beautiful enemy) であるようにせよ。手なずけられず、心底から崇敬される者。すぐに追い抜かされ見捨てられるようなありふれた好都合な存在などではなく。(351)

ジョージ・ケイテブは「美しい敵」という表現に戸惑いを覚えているが (110-112)、それほど違和感のある言葉とは思えない。距離があることは友情の支障ではなく、むしろその隔たりこそが相手を美しくする。その美しさをこそ友情に不可欠な要素として認めようとするのだ。この一節の元になった日記の記載 (1840年6月21日) には、「彼をそのままにしておけ。彼を君自身から守れ。(Leave him alone. Defend him from yourself.)」(746) という強い表現が見られる。

友はまず誰からよりもわたし自身から守られなければならない。わたしもまた友の領域へと踏み込んでしまう可能性を持つからだ。「われわれは静かにしていよう。——そうすれば神々のささやきを聴き取ることができるだろう。干渉するのはやめよう」(352)とエマソンは言う。こうした心的態度の根底にあるのが、既に縷々述べてきた主体の凹みなのであり、「恥」の感覚なのだ。この態度は、アーシックの言うとおりに、きわめて倫理的なものである。「友人は知り得ぬままにとどまらねばならない。というよりむしろ、占有され得ぬものに。多くの批評家にとって友情を思考するエマソンの失敗と見えたもの（冷たさの印とか孤立した自己への依存とか相互性のなさなどとして見えたもの）は、実際にはまぎれもない信条の核なのである。すなわち、〈占有すべからず〉。」(193)冷たさや他人との馴染まなさ、疎遠さは、エマソン自身も自覚していた欠点だという視点が間違っているわけではない。同時に、だからこそエマソンには他者を自分のものにとらえず、あくまでも他者であるものとして感覚することができた。

友人とは「自然界における一種のパラドックス」(348)だと言うエマソンの主張は、文字通りに受けとめてかまわない。それはエマソンに「似ていること」と「似ていないこと」とが作り出す眩暈を感じさせた。

友情が要求するのは、似ていることと似ていないことの間あの稀な方法である。それは相手側の力の現前と同意とによって互いの感情を害する。世の終わりまでわたしをひとりにしておいてくれ、わたしの友がふとした言葉や眼差しによってほんとうの共感を踏み越えてしまうくらいなら。わたしは敵対によっても服従によってもひとしく失望させられる。一瞬たりとも彼が彼自身であるのをやめさせてはならない。彼がわたしのものであることから来る唯一の歓びは、〈わたしでないもの〉が〈わたしのもの〉であることだ。(350)

他者は独特な魅力でわたしを惹きつける。わたしは彼（あるいは彼女）を自分のものにしたい。だがそうなってしまったら、彼（彼女）は彼（彼女）でなくなってしまう。Gustaaf Van Cromphoutが言うとおりに、「このよそよそしさを乗り越えようというわれわれの試みは、われわれがああな神秘に負っている尊敬を侵すことになるだろう。その神秘とは他者である。」(109)上に続く箇所でもエマソンは言う。「一があり得るより前に、そこにはまさしく二がなくてはならない。」(350)友人関係は（エマソン自身の願望とは裏腹に）決して「一」にはならず、「二」のままにとどまる。そのことに幻滅を感じながら、相手との隔たりを持ったまま、エマソンは友人とつき合った。それは周囲の人々の期待をしばしば裏切ったが、エマソンならではの倫理性をそこに見るとき、わたしたちは、なぜコンコードでエマソンだけが人々のネットワークの中心にいたことができたか、その理由を知ることになる。

「セルフ・リライアンス」の冒頭箇所に触れながら、Pamela J. Schirmeisterは「ただしく言え

ば、わたしの〈他者〉との関係が、主体を開始する瞬間を形作る。というのもエマソンがこの冒頭箇所ですべて示唆しているのは、自意識の命令、自己の自発的創設が起こるのは常にそして唯一〈他者〉のテキストを読む行為の中でだけだ、ということである」(80-81)と述べている。確かに少なくともエマソンの主体は〈他者〉によって開始される。充滿した強固な〈我〉などエマソンには持てなかったからだ。エッセイ「友情」は、エマソンにしか書けない自己と他者との間の嵌入の在りようをすくいとっている。相手を犯すまいとする配慮の中に、主体の凹みの中で他者に侵入されている自己がある。この在りようは近代的な個人主義を越えて、現代の倫理的な主体の姿を指し示している。わたしたちは友人をどのように他者として扱えるか、そのためにはどのような主体の在り方が望ましいのか。わたしはそこに、エマソンを通して、strangerを前にして震える主体を見ることができる。

Works Cited

- Arsić, Branka. *On Leaving: A Reading in Emerson*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 2010.
- Cayton, Mary Kupeic. *Emerson's Emergence: Self and Society in the Transformation of New England, 1800-1845*. Chapel Hill: The U of North Carolina P, 1989.
- Cromphout, Gustaaf Van. *Emerson's Ethics*. Columbia: U of Missouri P, 1999.
- Emerson, Ralph Waldo. *Essays and Lectures*. Ed. Joel Porte. New York: Library of America, 1983.
- . *Selected Journals 1820-1840*. Ed. Lawrence Rosenwald. New York: Library of America, 2010.
- . *The Letters of Ralph Waldo Emerson, Vol.II*. Ed. Ralph L. Rusk. New York: Columbia UP, 1939.
- Emerson, Ralph Waldo, and Thomas Carlyle. *The Correspondence of Emerson and Carlyle*. Ed. Joseph Slater. New York: Columbia UP, 1964.
- Kateb, George. *Emerson and Self-Reliance: New Edition*. Lanham, Maryland: Rowan & Littlefield Publishers, 2002.
- Harris, Kenneth Marc. *Carlyle and Emerson: Their Long Debate*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1978.
- Shirmeister, Pamela J. *Less Legible Meanings: Between Poetry and Philosophy in the Works of Emerson*. Stanford, California: Stanford UP, 1999.
- Steele, Jeffrey. "Transcendental Friendship: Emerson, Fuller, and Thoreau." *The Cambridge Companion to Ralph Waldo Emerson*. Ed. Joel Porte and Sandra Morris. Cambridge: Cambridge UP, 1999, pp. 121-139.